

『男爵の娘』

一・男爵の憂鬱

スペインー。

マドリッドの空は、あくまでも青かった。

そこへ向かって、直径10センチ程のオレンジ色の円盤が打ち出された。シユルルと空気を切る音を立てながら、それは秒速35mのスピードで勢いよく青空の彼方へ飛んで行く。その直後に、彼の銃から放たれた散弾が、一瞬でその円盤を捉える。オレンジ色の円盤は、あつという間に粉々に砕け散った。

それは、わずか数秒間のドラマだった。

しかし、真昼に開催された花火を見ているような美しさだった。それを見ていたスタンドの観客がいつせいに歓声をあげ、その勝者を称えた。この日も勝者はやはり彼だった。不敗神話はまたもや更新された。

彼の名は、近衛慎一郎。通称「男爵」。世界中の誰もが認めるクレー射撃界の王者の中の王者だ。コールマン型の口髭をたくわえたその王者は、ようやく射撃の姿勢を解いた。威風堂々と言う言葉は、まさに今の彼の為にあつた。

だが、今日は少し様子が違った。

最後の射撃が終わっても、男爵は射撃スペースからなかなか出ようとしなかった。観客の熱狂をよそに、じつと手に持つ自分の銃を見つめたままである。まるで、その銃と何か深刻な話をしているかのような様子だった。明らかに、男爵は不満気であつた。喜びを微塵も感じさせない彼のそれは、五大大会連続で世界選手権を制した直後の者の姿ではなかつた。今の彼にとって、もはや勝つこと自体は問題ではなかつた。その勝ち方に問題があるのだ。

しばらくして、うなだれたように首を横に振ると、彼はようやくその場から離れた。

二・組む相手

茨城県、土浦市ー。

「陽平。もう少しし、スピードを出すぞ！」

「ああ、勿論だ！」

玉木恭介と水野陽平は、取る物も取りあえず、桜土浦インターから常磐道に乗り、北へ向かった。

十五分ほどで友部ジャンクションを常磐道から北関東自動車道に移り、今度は西方面へ向かう。そして、ひとつ目の友部で降りる。料金所を出て五分ほど県道を走ってから山道へ入って行く。木々に囲まれた登り坂をしばらく走るとその奥に小さな湖が現れ、それからすぐに目的のクレー射撃場が開けて来る。

MJ友部射撃場と書かれたゲートをくぐり、彼らは白亜の大きなクラブハウスの手前にある広い駐車場に車を滑り込ませる。二人は足早にクラブハウスへ向かった。

つい四十分ほど前、あの男爵がこのMJ射撃場に練習に来ているという一報が入ったのだ。やっと、念願の彼に会うことができる。めったにないチャンスであった。男爵の生活の拠点はイタリアだからだ。彼の事務所は都内にもあるのだが、ほとんど留守電状態だった。しかも、彼は試合の遠征やイベントの招待などで世界各地を頻繁に行き来しており、イタリアの事務所の方もコンタクトが取れずにいた。

そんな最中、幸運にもスペインから帰国した彼が、成田からそのままプライベートでの射撃場に練習に来ているという情報が入ったのだ。その情報源は確かだった。

恭介達の車に気づいたプラーの岡島が、笑顔で近づいてきた。

「ご苦労様です。随分と早かったですね」

「岡島さん、連絡ありがとうございます。すっ飛んできましたよ」

「玉木さんには、このところ何かとお世話になってますから……。でも、絶対に誰にも言わないで下さいよ。もし、男爵の到着を教えたのが私だとばれたら、首ものですからね。あくまでも、偶然を装ってくださいね」

「ええ、その点は間違いなくお約束します。でも、万が一そうだったとしても、優秀なプラーの岡島さんをこの射撃場が手放せるわけがありませんよ」

「いえいえ、そんな。私なんか」

照れくさそうに、岡島が謙遜して見せた。

クレール射撃場には、必ず射撃手の得点を記録するプラーが存在する。誰でもが務まる仕事ではない。30m以上先の放たれた小さなクレールの円盤に、打たれた散弾が当たったかどうかの判断を、肉眼でしなければならぬのだ。それは容易な事ではない。中心近くに散弾群が命中すればクレールは綺麗に粉碎され、広がって飛び散るのだが、そうでないことの方が多い。中心を大きく外れ、わずかにしか欠けない場合もある。それを見極めなければならぬのだ。

彼らの仕事は、そういった着弾のジャッジにとどまらない。通常彼らは、プラー室で作業を行う。そこは言ってみれば、射撃場のコントロール・ルームである。そこでは、打ち出されるすべてのクレールの角度や速度などを制御できるようになっている。彼らはそこで、射撃手達が正しく円滑にプレーしているかを確認しながら採点作業を行うのだ。プラーは、こういった一連の作業を瞬時に、しかも正確に行わなければならないのだ。

「で、岡島さん。彼は？」

恭介は、居ても立ってもいられなかった。

「男爵は、まだ射撃場で練習中ですよ。かれこれもう、一時間以上です。でも、ご存じだとは思いますが、とにかく気難しい方ですから。刺激をしないように、くれぐれもお願ひしますよ」

「ええ、その点も心得ています。今日は、まったくの偶然を装っていきます。細心の注意で行動します」

恭介と陽平は、岡島に礼を言って、道を挟んだ反対側にある射撃場へ歩いて向かった。だが、二人は、射撃場の入口の手前数十メートルの所で足止めされてしまった。「貸し切りにつき入場禁止」の看板が立てられていたからだ。このオーナーの三上恵造と顔見知り

の恭介達なら、交渉すればあるいは入ることができたかもしれない。だが、それはやめておいた。男爵の気難しさは、業界では有名すぎるほど有名だ。万が一にも彼の機嫌を損ねてしまえば、恭介達の計画が水の泡になってしまう恐れがあったからだ。慎重を期して、二人は彼の練習が終わるまで待つことにした。ここまでくれば時間はいくらかかってもかまわなかった。

遠目だが、ここからでも男爵らしき男性が撃っているのはなんとか確認できた。

どうやら、撃っているのは彼一人だけだ。プラー室には、オーナーの三上が自ら入っているようだった。だから、岡島が恭介達に連絡を入れることができたのだ。この位置からでは顔などは、はっきりと確認できない。だが、五分、十分と時間が経過するうちに、その射撃手が男爵であることが徐々にわかってきた。そして、十五分程経過した時には、それは確信になっていた。聞こえてくる散弾銃の発射音が、間違いなく彼であることを証明していたからだ。

通常、クレイ射撃は飛ばされた標的「クレイ」を仕留めるのに、二発の弾を使うことができる。一発目を「初矢」、二発目を「二の矢」と呼ぶ。初矢でしくじっても、次の二の矢でクレイを割ればよい。そのどちらでも得点は同じなのだ。極端に言えば、一ラウンドを二十五点満点だとした場合、すべて二の矢を使っても同じ二十五点満点なのだ。これを可能性で考えた時に、初矢で済んだ時は文句なく標的を捕らえたことになる。だが、二の矢の場合は結果的にうまく捕らえた場合と、外した場合があるということになるのだ。そして、今聞こえてくるその発射音は、すべてが一発だけだった。つまり、すべてが初矢だ。すなわち、少なくとも彼はこの十五分間に一度も的を外していないのだ。

人間業ではなかった。いや、正確に言うとは練習とはいえそんな芸当ができる人間は、彼を置いて他には存在しなかった。近衛慎一郎、通称「男爵」、その人だけだ。

彼の名は、クレイ射撃そのものがスポーツとしてほとんど認知されていない日本においては、その業績ほどは知られていない。彼が、あえてオリンピックに出場していないことが知名度があまりない理由のひとつだとも言われている。もし、彼が出場していれば金メダルは確実だからだ。しかし何故か、彼は意識的にオリンピックだけは出場を避けてきていた。その理由には諸説があり、本当のところは誰にも明かされていない。

だが、一転して海外での彼の名声は伝説的なものであった。一度でも射撃に関わったことがある人間であれば、バロン・近衛の名を知らぬ者はいない。彼は、すでに二年に一回開催される世界選手権で前人未到の五連覇を成し遂げ、今なお絶対的王者として君臨し続けている。そして、世界中のクレイ射撃愛好者やその関係者は、いつしか彼を「男爵」と呼び、最大の敬意を払うようになったのだ。

恭介と陽平が所属するヤマホ・グループは、その男爵との何らかの提携を考えていた。世界的なブランドであるヤマホ・グループは、主に大きく二つの部門からなる。元々創業時から引き継がれている発動機部門は、バイクや小型船舶のエンジンを扱っている。もうひとつが、恭介達が所属しているスポーツ・レジャー部門である。スキーやテニス、アーチェリーの用品、プール関連、そしてヨット・レジャーボート関連、等を扱っている部門だ。

そして今回、ヤマホはクレイ射撃への進出を考えていた。

ヤマホは、この分野に新規で参入していく為にはどういうアプローチをしたらよいのか

を、入念に調査し検討した。その結果、どういう形であろうが、男爵の力を借りて立ちあげていくのが最善であるというのが現時点での結論だった。

最善と言うより、必然と言った方がより正しかった。そのすべてが男爵を中心に回り始めている今の世界のクレール射撃界の現状を考えると、彼抜きでは成り立たないのだ。

そして、その立ち上げの担当に抜擢されたのが恭介と陽平のコンビだった。

二人共、クレール射撃の経験はまったくといってなかった。幼なじみの二人は、もともとはヨットの選手だった。二人は、高校時代からヨット競技のコンビを組み、そのまま大学に進んでも同じヨット部でペアを組んでいた。卒業して、今のヤマホに入社したのも二人一緒だった。ヤマホ側は彼らに対してセットとしての企業価値を見出していた。二人のコンビが、高校、大学を通して国体などの主要なヨットの試合で見事な好成績を残していたからだ。それは、ヤマホのスポーツ・レジャー部門の新社員採用の基本的な戦略だった。その競技で高い実績を積んだ選手達は、結果的にその競技の協会や競技者などに様々な人脈を持っているからだ。ヨット部門は特にその傾向が顕著だった。そういう方針の効果もあって、ヤマホのヨット販売における国内でのシェアは九十パーセントを超えていた。

入社した二人は、研修も兼ねてヤマホの拠点がある各マリナーに配属された。スタート時は、恭介は浜名湖にあるマリナー、陽平は琵琶湖にあるそれだった。入社四年目には、二人の人脈が一番活かせる関東エリアにそろって転属となった。彼らは、関東エリア内のいくつかのマリナーとセーリング・スポットをまかされた。

そして、この一年間、彼らは茨城県の土浦市にある霞ヶ浦のマリナーに活動の拠点を置いていた。マリンスポーツ関連の販売の傍ら、クレール射撃への進出の準備をする為だった。その土浦市からそう遠くない友部町に、三上銃器製造会社Ⅱ通称MJがあるからだ。

MJ社は、伝統に裏付けされた技術力に定評のある国産散弾式銃の製造会社だった。ヤマホは、このMJ社をクレール射撃業界参入の足掛かりとしてビジネス・パートナーに選んだのだ。順調に進んでいけば、いずれは正式な製造・販売の契約を結ぶつもりであった。

MJ社をパートナーに選んだ最大の理由は、このMJ社こそあの男爵が唯一認めている日本の銃器工房であると言われているからだ。オーナーの三上恵造と男爵とは、古くからの友人関係にある。しかも、かなり親密らしい。そこで、恭介と陽平はこのところMJ社に頻繁に出入りしていた。そして、ついにこの日のチャンスとなったのだ。

三．完敗

一時間ほど経って、ようやく男爵達が射撃場からクラブハウスに引き上げて来た。

「よし、行こう！」

恭介と陽平が、腹をくくった。

ロビーで談笑している男爵と三上の元へ歩み寄る。だが、男爵を目の当たりにした時、一瞬、恭介達は怯んでしまった。調査中に何度も映像や雑誌で見えてはいたものの、実際に本人を目の前にしてみても、想像以上の威圧感に圧倒されてしまったのだ。間近で見る男爵の存在感は余りにも大きかった。日本人離れた長い脚を組みソファに身を沈めた男爵は、まさに玉座に座る王者そのものであった。

「やあ、玉木さんに水野さん。いらしていたのですか」

二人に気づいた三上が、優しい物腰で声をかけてくれた。

「はい。あの…、おじやまでなければ？」

「うん。まあ、それは…」

三上が答えに詰まった。

それは、自分ではなく男爵が決めることなのだと、彼は言いたげだった。そのことは恭介達にも理解できていた。

「ご迷惑は充分承知の上で、お願いします。男爵にご挨拶だけでもさせていただけたいと思いい、ずっとここで待っております。宜しいでしょうか？」

陽平が、一か八かで切りだした。

「すまん、近衛。仕事上の知り合いの方々だ」

困ったような苦笑いをしながら、三上が男爵に伺いをたてる。

「そういうことなら…。では、挨拶だけならお受けしましょう」

親友の意をくんで、男爵が立ち上がった。やはり大柄だった。

「はじめまして。近衛です」

コールマン型の髭を蓄えた精悍な顔つきと、骨太のがっしりとした体格は、立ち上がった後もやはり圧倒的な風格を誇っていた。

「ありがとうございます。私達はこのよう者です」

恭介と陽平が順番に名刺を手渡した。

「あのヤマホさんが、私に何か御用ですか？」

「実は、わが社は近々、クレール射撃の分野に本格参入したいと考えております。そこで、まず男爵にアドバイス等を頂戴したいと思ひまして」

恭介は、あれこれ考ええず、率直に真実を説明した。

「そうですね、趣旨はわかりました。しかし、申し訳ありませんが、今日はビジネスの話をする気分ではありません。どうか、またの機会ということでご理解ください」

丁寧な口調だが、やはり、ピシヤリと話を打ち切られた。

「勿論、それで結構です。いずれまた、改めてきちんと連絡をさせていただきます。では、今日はこれで失礼させていただきます」

恭介は、今日はこれで充分だと思った。

いや、これで充分としなければいけないと理解した。

だが、相手の陽平は、やってはいけないもう一步を踏み込んでしまった。

「あの…。連絡先などは、教えていただけられないでしょうか？ 実は、事務所の方には何度も電話をしていたのですが、まったく通じません。せめて、携帯の番号だけでも教えていただければ…」

恭介が止めようとしたが、間に合わなかった。

「君、もういいだろう。三上の顔を潰さない為に、私も我慢して君達に付き合っているのだ。これ以上は、遠慮したまえ！」

案の定、陽平の余計なひと言は男爵を怒らせてしまった。

「すみません。で、でも、それでは連絡の方法が…」

「君は、今、自分が何をしているかわかっているのかね？ 私の貴重な日本での時間に、い

きなり土足で入り込んできているのだぞ。アポをとってあるのなら、まだわかる。だが、これでは待ち伏せじゃないか！」

「す、すみません。でも、聞いてください。世界中のあなたのファンは皆、男爵と同じ銃で撃ってみたいのです。バスケットならマイケル・ジョーダンと同じシューズを履いてプレーしてみたい。ゴルフならタイガー・ウッズと同じクラブで打ってみたいのと、同じ心理なんです。それを我が社にサポートさせていたきたいのです！」

陽平は、良く頑張った。

それは、社内の企画会議の時に使った「決めせりふ」の引用だった。彼なりに一生懸命に知恵を絞った最高の賞賛の表現だった。だが、所詮はそれも男爵の並外れたスケールの前には有効な切り札にはならなかった。

「ふん。そんな見え透いた世辞は、わざわざ君から言っていただかなくても、その彼らと契約している本物のアメリカ・ナイキの担当者から直接聞いていますよ」

彼の返答の内容は、陽平のそれを遙かに凌駕していた。

「ナ、ナイキさんが…！」

陽平の完敗だった。

そして、完全に男爵を怒らせてしまった。だが、凍りついたようになってしまった恭介には、親友に助け船を出すことができない。

「それとも、君は、一昨日のマドリッドでの私のミスショットに対する明確な答えを、一緒に分析してくれるとでもいうのかね？」

「い、いえ、そんな。とんでもありません。まったくクレール射撃を知らないズブの素人の僕が。まして、男爵に…」

「ズブの…？ これは驚いた。君は、クレール射撃のことを何も知らずに私とビジネスの話をしようとしていたのかね。日本を代表するスポーツ・メーカーのひとつであるヤマホさんは、そんな担当者を私に寄こすのかね？」

「ええ。い、いや…。一応、一生懸命勉強はしているのですが…」

もはや、取り返しのつかない悪循環だった。

「マドリッドの選手権に会いに来たアデイダスの連中も、その前のトロントの時に来たナイキの連中も、皆もつと礼節をわきまえていたぞ。それに引き換え、君達ときたら！」

「も、申し訳ありません！」

恭介と陽平は、声を絞り出すように詫びた。

「話にならん。出直してきたまえ！」

二人は、何度も頭を下げながら、逃げるようにその場から立ち去った。そうするしかなかった。

四．小さな湖畔

MJ社の駐車場を飛び出て少し走ったかと思うと、急に恭介は車を路肩に停めた。

「どうした、恭介？」

助手席の陽平が、驚いて訊く。

「陽平。ちょっと、そこ、覗いてみようよ」

恭介が指差したのは、駐車場のすぐ隣にある湖だった。

大きくはないが、雰囲気のよさそうな湖だった。少しでもいいから、気持ちの仕切り直しが出来なかったのだ。二人が男爵から受けた精神的なダメージが、あまりにも大きかったからだ。

「いいねえ。行こう、行こう！」

車を降りた二人は、木立を縫って湖畔へ向かった。

「おおっ、ここは大正解だな！」

「ああ、気分転換にはもってこいだ！」

二人は、互いの拳を軽くぶつけ合った。

ベンチもデッキもない人の手の入れられていない自然のままの湖だった。だが、それだけに木立に囲まれた湖面の美しさが際立っていた。

「マリーナもいいけど、こういう自然の中の小さな湖もいいなあ」

「ああ。なんか、おとぎ話に出てきそうな湖だ」

「これで、ヨットとはいわないまでも、ボートでもあったら、プカプカができるんだけどなあ。そうすれば、今のこの最悪の気分から抜け出せるんだけどなあ…」

陽平が、嘆いた。

「ああ、そうだな。土浦に戻ったら、霞ヶ浦でやろう」

「うん、そうしよう」

二人はしばらくの間、無言で静かな湖畔のたたずまいに浸っていた。

風が無いせいもあって、文字どおり静寂そのものだった。

「ナイキにアデイダスカ…。やっぱり、どこも皆同じことを考えているんだな」

嘆くように、だが良く通る声で陽平が口を開いた。

やはり、どうしてもその話題から逃れることはできなかった。

「ああ…。彼の世界的な人気と実績を考えたら、当然と言えば当然だろうな。まちがいない、彼を押さえたところが業界を押さえる、ってことになるよ」

「それにしても、男爵の奴。評判どおりの気難しさだったな」

さらに良く通る声で、陽平が嘆いた。

「ああ、評判以上だったよ」

「くそっ、今考えても腹が立つ！」

「でも、あれは陽平もいけないよ。深入りしすぎだったよ。よく頑張ったのは認めるけどな。あれは、まずかったよ」

「すまん、恭介。その点は、僕も反省している。だけど、わかってくれよ。何度やってもコンタクトが取れないところで、やっと会えたんだ。このチャンスを逃したら、という一心だったんだ」

「うん、その気持ちは誰よりもよくわかっている。それは、僕も同じだ」

「だいたい、男爵かなんか知らないけど、あいつだって失礼千万だよ。初対面の僕達に、説教じみたことまで言いやがって！」

自分の犯したことはとりあえず柵に上げて、陽平が怒りをあらわにした。その直後だった。

「あの…」

二人の後方の茂みの中から声がした。女性の声だった。

「ごめんなさい、突然…」

茂みから姿を現したのは二十代半ば程の若い女性だった。

背が高く、まるでファッション雑誌から抜け出て来たような華やかな雰囲気であった。そして、美しいその容姿は、木立に囲まれた湖畔の情景にも見事に溶け込んでいた。恭介は、再びおとぎ話の中のような非現実的な世界にまぎれ込んだような錯覚に陥った。

「あの…。今、お二人が話していた「男爵」と言うのは、近衛慎一郎のことですか？」

意外な出現のしかたと、更に輪をかけて、彼女の口から出たその意外な人物の名前に恭介達は絶句し、放心状態になった。

「そ、そうですか…？」

恭介が、何とか現実の世界に引き戻され、やっとのことで声を絞り出した。

「男爵をご存知なのですか？」

「ごめんなさい。そこで読書をしておりましたら…。盗み聞きする気はなかったのですが、はつきりと聞こえてしまつて…。どうやら、父がまた失礼な振る舞いをしてしまったようですので、つい…」

「えっ、父って？」

陽平が叫んだ。

「はい、私は慎一郎の娘の近衛亜里沙と申します」

「えええっ！」

今度は、二人が声を合わせて絶叫した。

「あ、あの男爵の…。冗談では、ないですよね？」

陽平が、狐につままれたような状態で確認する。

「はい。残念ながら、私はその男爵の娘なのです」

二人は再び、放心状態に陥った。

何をどう話していいのか、まるでわからなかった。とにかく、二人はそれぞれの名刺を彼女に渡すことにした。あまりにも、サラリーマン然とした振る舞いであつたが、それしか思いつかなかつた。

「ああ、ヤマホの方ですか。最近、事務所の方に何度も電話を頂戴していましたね」

彼女は、そのことを知っていた。

「そのことを、ご存知だったのですか？」

「ええ、ごめんなさい。留守電で知っておりましたし、それはきちんと父にも伝えました。

私は、父の秘書をやっておりますので。でも、父が放っておけと言うものですから…」

「そうか。そうだったんですか…。やっぱり、最初から僕達なんかは眼中になかつたんですね。だから、さつきも…」

恭介と陽平は顔を見合わせてうなだれた。

「あ…。ごめんなさい。そういう意味ではないのです。誤解です。別に、ヤマホさんだからと言うわけではなくて、他の皆さんにもすべてそうなのです。特に最近は、そういった申し入れの電話がとても多くなつていて。父も、そのことになんか嫌気がさして…。世界中から、それこそ山のように電話やファックス入つて来るのです。それで…。どうか、

お気を悪くならさないでください。本当に、ごめんなさい」

「そうだったんですか。そういう事情であれば、よくわかります」

亜里沙の話を聞いて、二人は納得せざるを得なかった。

片手間に対応するべき相手ではなかったのだ。

しばらくの沈黙の後、陽平がふと思いついたように彼女に訊ねた。

「さっき、世界中から申し入れがあると言われましたが、やはりその中にはアディダスさんやナイキさんも？」

「ええ、ありましたわ」

「やっぱり…」

再び、恭介と陽平は顔を見合わせた。

「アディダスさんやナイキさんは、電話等だけでなく、実際に父に接触をしてくれていますよ。私も同席していましたから」

彼女の話は、男爵のそれと一致していた。

「彼らの接触方法について、お父さんは何か感想をおっしゃっていましたか？ いいとか、悪いとか？」

二人はその部分に関心があった。

「ええ、そうですね。私が覚えているのは、二社さんとも父と会う時は必ず専用の日本語ができる通訳さんを同行させていたことです。それについては、父は、なかなかだと感心していました」

「二社さんとも、本格的な交渉前の段階からそんな手間暇をかけていたのですか？」

「ええ。父は義理の兄がイタリア人ですし、イタリア語と英語については不自由がないのですが、二社さんはそれがわかっていても、敬意の証しとしてわざわざ通訳さんを用意されていたようです」

「そうだったのか。さすがだ…」

そう考えると、さっきの自分達のとった男爵への態度は、あまりにも身勝手に配慮に欠けていた。そのことを二人は痛感せざるを得なかった。男爵が礼節に欠いていると怒るのにも納得がいった。

やはり、片手間に対応するべき相手ではなかったのだ。やるのなら、会社の総力を挙げてあたるべき相手だったのだ。

「いろいろ教えて下さって、ありがとうございます。とても、参考になりました」

恭介が、彼女に礼を言った。

「あの、日本国内ではどんな会社がアプローチしてきましたか？」

陽平の方は、まだ情報収集にどん欲だった。

「私の知る限りでは、国内の会社ではヤマホさん以外にはありませんよ」

「良かった…」

今度は、二人とも安堵の表情を浮かべた。

それを見ていた亜里沙が、二人の心境を察して話し始めた。

「それに、アディダスさんにしても、ナイキさんにしても、父は契約する気はないようですよ」

「え、何故ですか？」

「確かに、どちらも素晴らしい会社ですし、その点については父も認めてはいます。実際、どちらとも親しくもさせていただいています。ただ、父は以前こう話していました。アデイダスさんやナイキさんのそのどちらにも、三上の職工さんはいないと…。勿論、この言葉は、イタリアの銃メーカーさんに対しても当てはまります」

「つまり、男爵…。いえ、お父さんは、本場イタリアの銃メーカーさんよりも、三上さんの工房の方が上だと？」

「はい、おそらく。少なくとも、父にとってはそのようです」

「そうなんですか。MJ社って、そんなに凄いですか？」

「実は、父はクレー射撃の選手になる前の若い頃は、イタリアの銃工房で修業をしていたことがあるのです」

「ええ。それは僕達も、存じ上げています。有名な話ですよ」

「はい。そんな父だからこそ、それがわかるようです」

「なるほど。自分自身の目で両者の比較ができるということですね？」

「はい、そういうことです。それに、三上さんとは若い頃からのとても親しいお友達ですから」

「そうなんですか。だとすると、僕達はMJさんと提携しておいて大正解だった」

「ああ、本当に…」

それを聞いた恭介達は、安堵したようにそう呟いた。

そして、改めて日本の匠、三上の工房の実力を知った。いや、それどころか想像していた以上の実力だった。

「あの、素朴な質問なんですけど…」

気持ちに少しだけ余裕のできた陽平が、再び彼女に訊いた。

「さつき義理の兄と言われましたが、つまり、男爵にはイタリア人の奥さんがいるということですか。つまり独身なのかと…？」

調査資料にも、確かに独身とあったはずだ。

「はい。でも、母はもう随分前に亡くなってしまいましたの」

「ああ…、そういうことでしたか。それは、大変失礼しました」

「いいえ。本当に私が小さい時の話ですから」

「ということは、亜里沙さんは日本人とイタリア人の…」

「はい。ハーフということになります」

「そうなんですか。それでそんなに背が高いんですね。ですと、イタリア語とかも話せるんですか？」

「ええ、そうですね。他にスペイン語と英語とフランス語くらいなら…。それと、勿論、日本語もですけど」

「へえー、凄いですね！」

恭介と陽平が、いつもの見事なコンビネーションで驚きの声を上げた。

「父は、早くから私を自分の秘書にするつもりでしたので、学生の頃から語学の勉強ばかりをさせられていました。ですから、世界中のどこへ行くのにも、父に同行しなければならぬのです…」

「何だか羨ましいような…。だけど、やっぱり可哀そうなような…」

陽平が、思わず本音を呟いた。

「おい、陽平。言葉に気をつけろ」

あわてて、恭介が注意しようとするが、

「いいのです。陽平さんのおっしゃるとおりです。まさに、私の心境をピッタリと言いついていますから」

「すみませんでした。つい…」

陽平が、頭をかいた

「いいえ。本当に、陽平さんのおっしゃる通りなのですから…。私は、その大きすぎるメリットと、大きすぎるデメリットの間に挟まれて、いつも悩んでいるのです」

「いや、やっぱりね。そうでしょう。わかります、わかります！」

自分の考えが正しいと亜里沙に言われ、陽平は有頂天になった。

「はは…、ばーか。調子に乗りやがって。まったく、単純な奴だ！」

そう言つて恭介が陽平の頭を小突くと、三人は大笑いになった。

そして、一気に打ち解けていった。

「そう言えば、さつき、父と会ったんですね？ とても、憤慨されていたようですが、一体、父と何があつたんですか？」

亜里沙が、肝心なことを思い出したように二人に訊いた。

「ええ、実は…」

恭介達は、これまでの経過を説明した。

亜里沙は時には相槌を交えながら、一生懸命にそれを聞いてくれた。

「そうだったんですか…。父は、いつもそうなんです。もともと、そういう性格なんです。最近は特にそれが酷くなつていて…」

「いや、一線を越えてしまったのは僕達の方ですから」

「そんなことはありません。ただ、ひとつだけ父をかばうとしたら、今日はいつにも増して機嫌が悪い日ではありません」

「といたしますと、何かあつたんですか？」

「ええ、一昨日マドリッドで行われた競技会で、自分の思うような射撃ができなかったようなんです。いつものように、ほぼ満点に近い成績で優勝こそできたんですが、満足のいく内容ではなかったようなんです」

「何か理由があつたんですか？」

「それは、本人にしかわかりません。自分に理由があるのか。銃にあるのか。それとも、風のような自然現象が原因なのか…。とにかく、競技会が終わるや否や、いきなり、三上の所へ行くと言いつ出したんです」

「そういう話になると、僕達凡人の理解できることではなさそうですね。孤高の人のみか知る領域なのかもしれませんね」

「そうかもしれません。それにしても、父には人間としての常識がなさ過ぎです。父は、そうふるまうのが当たり前だと勘違いをしているんです。今回は、嫌な思ひをさせてしまつて、本当に、本当にごめんなさい」

「いえいえ、そんな…。別に、亜里沙さんが悪いわけでもないのに、さつきから、何度も何度も謝らせてしまつて」

「いいえ。それに、こういうのにはもう慣れっ子になっていますから…。最近では、ほとんど父の非礼を相手様に謝るのが私の仕事のようなものになってしまっていますから…」

「ははは…。だとすれば、本当に酷い仕事ですね」

「ええ、ストレスが溜まりっぱなしです」

再び、三人が大笑いした。

「僕達も、今日みたいにストレスが溜まる事はしよっちゆうですが、とつても良く効く解消法があるんですよ」

恭介が湖を見ながら言った。

「プカプカだよな」

陽平が続く。

「ああ…」

十年來のコンビの気持にズレはなかった。

「え…？ 何ですか、そのプカプカって？」

亜里沙が、不思議そうにその聞きなれない言葉の意味を訊ねた。

「プカプカとは、僕達二人の合言葉です。僕達は昔から嫌なことがあると、ヨットで沖に出て、そこで停泊してゴロンと寝そべるんです。で、波に揺られながら空を見ているんです。そうすると、大抵のことは大したことじゃないと思えてくるんです」

陽平が、得意気にその効用を説明する。

「へえー、素敵ですね。いいなあー。では、お二人共ヨットに乗られるんですね？」

「はい、大好きです。実は、僕達はこう見えてもかなりの腕前なんですよ。何なら今度、

亜里沙さんも…」

陽平がこの日最も重要な話を、彼女にしかけた時だった。

亜里沙の携帯が鳴った。

発信者の名前を見た彼女の顔つきが、いきなり暗く変わった。

「ごめんなさい。その…、父からです」

「ええっ！」

一気に、その場に緊張が走った。

「…ええ、すぐそばにいます。…はい、すぐに戻ります」

携帯を切ると、残念そうに彼女が言った。

「ごめんなさい、もう行かないと…」

もう一度携帯に目をやった彼女が、思いついたようにポケットから名刺を取り出すと、それを見ながら携帯に番号を打ち込んだ。

すぐに、恭介の携帯が鳴った。

「これが、私の番号です。もし、私でお役に立てるようなことがあったら、いつでも連絡してきて下さい。いつでも結構です。近々、オーストラリアに行きますが、海外でもつながりますから…」

「あ…、ありがとうございます」

突然のことに、恭介はそう返すのがやっとだった。

「とても、楽しかったです。残念ですけど、これで失礼します」

そう言って、亜里沙は足早に射撃場の方に去って行った。

取り残された二人は、しばらくポカンとしていた。この場所に居るうちは、現実の世界ではないような感覚だった。

五・親友の「読み」

茨城県、霞ヶ浦―。

その日の夕刻、恭介と陽平は霞ヶ浦の穏やかな波間で揺られていた。いわゆる、プカプカである。

帆を緩め、アンカーを湖底に降ろして、コックピットに寝っ転がりながら波に任せて揺られる。それは、二人にとっては丁度ハンモックでくつろぐのと同じだった。

この470級は、二人が一番乗り慣れている小型のヨットだった。

高校、大学を通して、二人はこの型のヨットで数多くの試合をしてきた。名前の由来にもなっている全長が4メートル70センチのこのディングー型の小型艇は、二人で操縦するタイプものだ。

「ふうー。それにしても、大変な一日だったな」

両腕を枕代わりにし、薄暗くなってきた空を仰ぎながら恭介がため息混じりに言った。

「ああ…。でも、恭介にとっては、いい一日だったよな？」

陽平が、意味ありげに呟く。

「えっ、何で？」

恭介には心当たりがない。

「だって、彼女から携帯の番号を教えてもらったじゃないか」

「彼女って、亜里沙さんのことか？」

「当り前だろう」

「教えてもらったって…。あれは、そういうのじゃないだろう」

「いや、そういうのだよ」

「何を言っているんだよ。あれは仕事の為だろう。事務所の電話では連絡がつきにくいと言った僕達の話に同情して、彼女が気を使ってくれたんじゃないか。それが、たまたま僕の方の番号だったってだけのことだろう？」

「ははは…。ところが、そうじゃないんだなあ」

「じゃあ、どういうことだよ？」

「おまえは、ヨットと仕事に関しては頭がキレるが、女に関しては、相変わらずダメだなあ」

「陽平だけには、それは言われたくないね」

「ははは…。失礼な奴だ。そんな風に言うとは、理由を教えてやらないぞ」

陽平は、なおも勿体ぶるように言う。

「そこまで言われると、ちよつと気になるな。教えてくれよ」

恭介は空を眺めたまま興味のないふりを装っていたが、内心は違っていた。

陽平が上半身を恭介の方に捻って、本格的な説明の体勢に入った。

「よし。では、教えてやろう。あの時、僕は見たんだよ」

いかにも、自信ありげな語り始めだった。

「何を見たんだ？」

「彼女がポケットから僕達の名刺を取り出して、携帯に番号を打ち込んだ時のことさ」

「それが、何なんだ？」

「彼女が、僕と恭介の二枚の名刺を取り出した時、実は、最初に上にあっただのは僕の名刺の方だったんだ。ところが、彼女はわざわざ下にあるおまえの名刺を取り出して、携帯の番号を打ち込んだんだよ。この意味がわかるだろう？」

「いや、わからないよ」

「まったく、もう……」

鈍感な奴だ、とでも言いたげに陽平が続けた。

「いいか、恭介。時間のない中で、もし単純にヤマホの社員と連絡を取るといふ目的だけであれば、どちらの携帯番号でもよかったわけだろう。普通なら、上にある僕の名刺の携帯番号をそのまま打ったはずさ。ところが、彼女はあの慌てていた状況の中で、あえて下にあるおまえの名刺の番号を選んだわけだ。わざわざそうしたのは、彼女はヤマホと連絡がとりたかったのではなく、恭介と連絡がとりたかったってことだよ」

陽平は、得意げに言い切った。

「ははは……。ばーか、考えすぎだよ。まったく、おまえは想像力の逞しい奴だ」

「間違いないって。親友の僕言うことが信用できないのか？」

「やれやれ。その親友の「読み」を信用して、今までに何回ヨットを転覆させたことか……」

三重の大会の時は、それで優勝を逃したしなあ……」

そう言って恭介が、枕代わりをしていた一方の左手で陽平の頭を小突く。ヨットは、コース取りと、風の「読み」とが、勝敗を左右する競技なのだ。

「ははは……。ここでその話を持ち出すなよ。でも、今回は絶対にそうだって。それに、彼女はおまえの顔だけを見ながら、外国でも通じるからいつでもかけてきていいって言うていたし……」

確信を持った陽平は、意見を譲る気はないようだった。

「わかった、わかった。おまえがそこまで言うんなら、そういうことしておいてやるよ」

恭介は、根負けした。

「だったらさ、恭介……。もし、僕の読みが本当だとしたら、嬉しいだろう？」

「そんな風に見ていなかったから、わからないよ」

「そんなはずはないだろう。彼女は完全に恭介の好みのタイプだからな。背は高いし。西洋風の顔つきだし。あ、そうじゃないか。本当に半分は西洋人だった。ははは……」

「ははは……。確かにそうだけど。でも、とてもそんな目で見る余裕なんか無かったよ。まさか、あんな形で男爵の妻の娘さんと出会うとは思ってもみなかったからね」

「まあ、そうだったけど。でも僕はしっかりと確認できたよ。あんなに綺麗だし。性格もよさそうだし……。僕が恭介だったら、きつと今夜は嬉しくて眠れないだろうな」

星が輝きだした空が、陽平をロマンチストにさせていた。

「それよりも、陽平。どうせなら、男爵に認めてもらって、堂々と仕事で連絡が取れるように頑張ってみようぜ」

「やれやれ……。さすがは、玉木恭介だ。で、何かいい考えでも浮かんだの？」

陽平は渋々、頭の回路をビジネスモードに切り替えた。

「ああ、ひとつだけ…。男爵に再チャレンジする前に、やっておくべきことがあると思っただ」

「それは何だ？」

「男爵は別れ際に、僕達に出直してこいと言ったよな？」

「ああ、確かにそう言った。今考えても、腹が立つよ」

「僕は、まず始めに三上さんの所で銃の勉強を一からしてみようと思う。すべては、そこからだと思っただ。遠回りになるかもしれないが、やはり次に男爵に会う前にクレイ射撃のことを少しでも体で知っておく必要がある。それが、彼への礼儀だと思う。男爵や亜里沙さんとの話を通じてそう痛感したんだ。陽平は、どう思う？」

「凄いいよ、恭介。その通りだよ。大賛成だ！」

「よし、それならば決まりだ。そうしよう！」

二人は、拳を軽くぶつけ合った。

その夜、プカプカの効用もあって陽平は熟睡した。一方の恭介は、なかなか寝付けなかった。陽平の言ったとおり、亜里沙のことが頭から離れなかった。

六・突然の提案

茨城県西茨城郡友部町―。

クレイ射撃場から一キロほど離れた所に、MJ社の工房があった。

その日の早朝、玉木恭介は工房内で掃除をしていた。

職工達が出社する前に工房内の掃除をするのが、見習いである彼の日課になっていた。大きな二棟の建屋からなる外観は、中堅の鉄工所という雰囲気だった。創業から一五〇年以上の歴史を誇るこの銃器製造会社は、まさに日本の散弾式銃の歴史そのものと言っても過言ではなかった。その製造技術は代々に渡って脈々と受け継がれ、そして磨かれてきたのだ。

十日前、恭介はヤマホの本社に報告と提案を行い、MJ社の工房に研修に入る許可をとりつけた。そして、提携先のMJ社へ出向という形をとって、とりあえず一年間そこで世話になることになった。相棒の水野陽平も同じ出向を望んだが、二人揃ってということになると肝心のマリン・レジャー部門の運営に支障をきたしてしまうので、今回は恭介一人だけの出向になった。

工房に通い始めた恭介は、日を追うごとに一挺の銃を造るのにどれほど多くの材料と手間暇がかかるのかが身に沁みてわかってきた。

同じ金属の部品であっても、部位に応じて材質が違っているのである。材料だけでなくそれぞれに加工の方法も違う。使われるのは金属だけではない。木材やラバーを使う部位もある。その全部の加工方法がそれぞれに違うのだ。例えば、肩に抱える部分である銃床部は木製だ。この部分を造るには、まず木材の選定から始めなければならない。その切り出しと、木目の見極め、そして削りと磨きと塗りの作業。これはまさしく伝承された木工芸の技術だ。

片や、機関部は金属の組み合わせだ。昔は鍛冶職人の領域だった。今は、工作機械を使った金属加工の技術だ。金属を削り出し、研磨する。だが、いずれにしても決め手になるのはそれを扱う職人の技である。つまり、散弾銃造りとは、数種の手工業と数種の機械工業を集約した総合集約産業なのだ。それらの要素が結実された時、美しく、かつ精密で頑強な芸術品が生み出されるのだ。すなわち、散弾銃だ。

そう考えた時に、恭介はある答えにたどりつく。

これはまさに、日本人の最も得意とする分野だと。手先が器用で勤勉な日本民族は、物造りにおいてはイタリアやドイツのクラフトワークに引けを取らない。木工のような伝統的な手工芸はもとより、機械を使った加工技術においても同じことだ。例えば、最先端のNASAのロケットの部品の一部が、東京の下町の小さな町工場（こうば）で作られているというのは有名な話だ。その職人の金属の加工や削り出しの技術は、精密機械の加工のそれを凌ぐのだ。日本にも潜在的なその力は充分過ぎるほどあったのだ。あの男爵が、三上の工房の質の高さを認めていたのは、至極当然なことだったのだ。

こうして恭介は、ある確信に至った。MJ社の物造りの力（技術力・製品力）と、ヤマホの持つ世界的ネットワーク（販売網・販売力）と、これに男爵の知名度（ブランド力）が加われば、これ以上ない最強の組み合わせになると。必ず、素晴らしい銃を世に送り出すことができる。

そこへ男爵の参加が叶えば、まさに鬼に金棒だった。だが、今はまだそれを考えないでおこうと恭介は思った。後先を考えずに、今すべき事だけをしよう。

突然、携帯が鳴った。

相手先の名前を見て、恭介は目を疑った。

何と、近衛亜里沙からだ。

「おはようございます。突然、朝早くに、すみません」

確かに、本人の声に間違いなかった。

「いいえ、大丈夫ですよ。もう、ひと仕事し始めていましたから」

恭介は、込みあげる嬉しさを噛み殺し、平然を装って答えた。

「よかった……。今、お話してもよろしいですか？」

「ええ、勿論です」

「MJの工房の方で働くことになったのですね？」

「はい。とはいっても、当面は、一年間の期間限定ですが。よくご存じですね」

「三上さんから伺いました。その理由も……。りっぱなお考えだと思います」

「ありがとうございます。でも、それはある意味、あなたのおかげなんですよ」

「えっ。私の、ですか？」

「ええ、そうです。もしあの時あなたと会わずにいたら、僕はあのまま男爵の姿勢を理解できずにいたと思います。こんな考えも思いつかなかったでしょう。だから、あなたには心から感謝しています」

「そ、そんな。私なんか何も……」

思わぬ形で感謝の意を言われた亜里沙は、思わず言葉を詰まらせた。

一気に胸の鼓動が高まるのを感じた。遠く忘れていた感覚だった。

電話口での二人の会話が、いったん途切れた。その間、彼女は必死にその高鳴りを鎮め

ようと努めた。緊張感に包まれた嫌な高鳴りではなかった。自分が自分でなくなってしまうような不安と喜びが入り混じった動揺だった。

「亜里沙さん…、どうかされましたか？」

しばらくして、恭介が訊いた。

「は、はい…」

「あの…。僕にお電話をいただいたのは、何か…？」

「ご、ごめんなさい。そうでしたね。あの…。今日のお昼時は、お時間空いていらっしやいますか？」

「はい、大丈夫ですが」

「実は、父の使いでそちらへ行くことになったものですから。もし玉木さんがよろしければ、お昼でも一緒にどうかと思ひまして。この間は、お話が中途半端に終わってしまいましたから…」

「それは嬉しい提案ですね。是非お願いします！」

知らず、恭介の返答に力が入っていた。

「よかったわ」

「工房で待つていればいいですか？」

「できましたら、他の方の目もありますから、この前の湖でどうでしょうか？ 食べるものは私の方で用意していきます」

「わかりました。じゃあ、お昼に湖で…」

「はい。では、のちほど」

亜里沙は思わず、通話を終わったその携帯を胸に押し当てていた。

まだ、ドキドキしていた。そして、ようやく胸の鼓動が収まると、小さくガッツポーズをした。

数日前に、恭介のMJ社での修行の話を三上恵造から偶然聞かされた時、亜里沙は内心飛び上がって喜んでいた。無論、恵造の方は亜里沙と恭介がすでに顔見知りであるということは知らない。単に、提携先のヤマホから、銃造りにとても熱心な若者が出向してくるという話をしたただけであった。その話を聞いた時、彼女は自分でも戸惑うくらいに喜んでた。

電話を切った恭介は、あまりの突然の出来事にしばらく茫然としていた。

あたりを見回した。薄明かりの射す、ひと気のない普段の工房内のままだった。もう一度、携帯の通話履歴を確認して見る。間違いなく、近衛亜里沙と表示されている。それが現実だと確認されると、そのうちにじわじわと嬉しさがこみ上げてきた。

恭介は、その場で小躍りした。無邪気な子供のように小躍りした。

七．大きな変化

昼過ぎ、恭介が湖に行くと、亜里沙が待っていた。

早朝の電話は、やはり夢ではなかった。

おとぎの国の女性は、間違いなく湖を背に自分の目の前に立っていた。やはり、美しく

った。この二週間、忘れられずに思い描いていたのと変わりなく美しかった。いや、それ以上だった。

「突然のお誘いで、すみません。ご迷惑ではありませんでしたか？」

「とんでもないです。とても嬉しいです！」

「よかった…」

しばらく、二人は声も出さずに互いの顔を見合っていた。ずっと、そのままでもいいと感じていた。

二人は、湖畔の草むらに腰かけた。

「素敵な湖ですよね？」

「ええ、本当に」

「亜里沙さんは、よくここに来られるんですか？」

「ええ。この湖が大好きなので、MJに来る時はいつも出がけに自分で簡単なお昼を用意してきて、ここで食べているんです。今朝もそうしようと思っていて、玉木さんのことを思い出したんです。それで、思い切って連絡してみました。本当にあり合わせのものですけれど、よろしければ…」

そう言って、彼女はサンドイッチとコーヒーポットを取り出した。

「とても旨そうだ。いただきます」

恭介はさつそく、サンドイッチをパクついた。

食パンを使ったものではなく、もつとまん丸として歯ごたえのあるパンにレタスとチーズとトマトがはさんであつた。彼は、それを黙々と食べ始めた。

「いかがですか？」

何も話さずに食べ続ける恭介に、亜里沙は心配になって訊ねた。

「初めて食べる味ですが、最高です。とても美味しい！」

「オリーブオイルと粗挽き胡椒が多目に入っているからだと思います。亡くなった母がよく作ってくれた私の好きな味なんです。ただ、イタリア人の味覚が玉木さんの好みに合うかどうか少し心配でした」

「ぼつちりです。病み付きになりそうです」

「よかったわ。…それから、これも。お口に合うかどうか…」

それは、アルミホイルに包まれていた。

「それは？」

「パウンドケーキです。おととい作った残りものですが」

「ひよっとして、それも亜里沙さんが？」

「ええ、ケーキを焼くのが好きなんです」

「じゃあ、それもお母さん直伝の？」

「ええ、そうです」

「母と娘って、いいもんですね。そういう繋がりがあって」

「そうですね。母が亡くなったのは私がまだ小さい頃でしたが、それでもキッチンで教わったことは覚えているものなんです」

恭介の言葉を聞いた亜里沙は、嬉しそうにコーヒーのお替りをついであげた。

「そういえば、先日は、父のことで本当に失礼しました」

「いいえ、とんでもない。今朝電話でも言いましたが、むしろそのことに感謝しているんです。できれば、もう一度あなたに会ってそのことを伝えたかった。そして、お礼が言いたかったんです」

「そう言っていたけると、少しは救われます」

言いながら、亜里沙は今朝の電話の時のと同じ胸のときめきを覚えた。

だが、恭介の方は真剣な眼差しで話し出した。

「新しい分野に参入しようとしているのに、僕達ヤマホは、それをあまりにも安易に考えていました。三上さんの会社と提携さえしていれば、あとはうちのグループの力で何とかなる、くらいにしか考えていなかったのです。僕は、銃造りを舐めていました。自惚れていました。大きな間違いでした。もし、あの時にああやって男爵に窘められていなかったら、きっとこの事業参入は早々と失敗していたと思います」

恭介は、実直に反省を続けた。

「売る物をきちんと理解せずに造っていても、買おうとする方に受け入れてもらえるわけがありません。何故なら、決して安い買い物ではないからです。銃は高価なものです。よほど買う側のニーズを理解し、それを実現したものでないと見向きもされません。売れるわけがないんです。だから、僕は改めてきちんと銃の勉強をしようと思ったんです。どこまで理解できるかは、正直まだわかりません。でも、できる限りそうなるように努力はしてみましたと思います。男爵に色々お願いに伺うのは、それからのことだと思っただんです」

じつと、それに聞き入っていた彼女が口を開いた。

「玉木さん、素晴らしいお考えだと思います。きっと、父もいつかあなたのその姿勢を理解してくれると思いますよ」

「そうかなあ、そうだと嬉しいんですが…」

やっと、恭介に笑顔が戻った。

大切な話を伝え終えて、ホッとしたようだった。恭介はアルミホイールを開けて、パウンドケーキを口にした。それからすぐに、ううっ、と唸りを上げた。すぐに、もう一切れを口にして、また唸りをあげる。

「どうか、されましたか？」

「亜里沙さん。こ、これ…。旨いです！」

そう言っ、もう一口。間を入れずにもう一口。更に、もう一口。しまいには、残りのすべてを口に頬張った。

「こんなに美味しいケーキを食べたのは、始めてです！」

パウンドケーキで口を膨らませたまま、恭介が叫んだ。

「本当に？」

「お世辞でも何でもなく、本当です。美味しすぎて、死にそうです！」

「まあ…、ありがとうございます。嬉しいわ。ちよっとは自信があったんですが、そこまで喜んでいただけるとは…。持ってきてよかったわ」

「亜里沙さん、天才ですよ。これはプロの味だ。いや、それ以上です！」

「ほほほ…、そこまでは…。でも、海外で美味しいケーキに出会った時には、なるべくレシピを研究するにはしています。それと、ケーキの他に、ミート・パイも得意なんですよ」

「ミート・パイも？ …今日は、持ってきてきてないですよね？」
「ごめんなさい。あれは手間がかかるので、さすがに今日は…」
「是非、そのミート・パイも食べてみたいですよ！」
「うふふ…。では、次回はそれをお持ちしましょう」
「是非、お願いします…。あの、さっそくですが、その次回はいつになりそうですか？ できれば、早い方が嬉しいです」
「ええ。できるだけ早くします」
二人は、気づかぬ間にごく自然な形で、次回も会う約束を交わしていた。
その日の夜、東京に戻った亜里沙から電話が入った。昼休みの時間は、今の二人にとって、あまりにも短かったのだ。
二人は、時間のたつのも忘れて互いの話に夢中になった。
その翌日の夜も、電話で話した。楽しくて、楽しくて仕方がなかった。次に会うのが、楽しみで仕方がなかった。待ち遠しくて、仕方がなかった。

八・目撃

二日後、水戸市市街―。
その日、玉木恭介は水戸駅の界隈に出てきていた。
何かちよつとした用向きがあると、水戸駅のあたりに来ることが多かった。MJ社の工場がある友部からは、車で三十分少々で行くことができる一番近い大きな街だからだ。
買い物を済ませ、駅前の駐車場へ向かって歩いている時だった。大きなホテルの前にさしかかったところで止められた。
「申し訳ありません。ご協力をお願いします！」
ホテルのドアマンが、赤い電飾ランプの棒をかざして歩行者を止めたのだ。
どうやら、ホテルの正面玄関の路上に待機するリムジンへ客を通す為のようだった。そこは、茨城県内でも最上級のホテルではあるが、通常は、ドアマンがその為に一般の歩行者を止めることまではしない。よほどの重要な客なのであろう。
じきに、正面玄関からその客が出てきた。
まるで相撲取りのような、大柄な五十代ほどの男だった。連れの若い女性と腕を組んで一緒に出てきた。
その女性を見て、恭介は目を疑った。
近衛亜里沙だった。
連れの男と腕を組んだまま、楽しそうに話しを交わしている。
その時の二人の会話が一瞬だけ、聞こえた。彼女は、相手の男のことを親しそうに「パパ」と呼んでいた。それは、間違いなくあの亜里沙の声だった。
二人は慣れたように待たせてあった黒塗りのリムジンに乗り込んだ。直立で待機していた別のドアマンがその後部座席のドアを開けると、すぐに車は走り去っていった。
その一連の様子を、恭介は呆然と見ていた。
MJ社の社員の寮の自室に戻っても、その呆然状態は続いていた。

それは、時間にすれば、わずか数十秒の出来事だった。だが、それでも、二人の親密さを測るには十分すぎるほどの時間であった。

自分にしか見せないものと、勝手に思い込んでいたあの時の彼女の嬉しそうな笑顔が、頭にこびりついて離れなかった。親しそうに「パパ」と呼んでいたあの声が、耳にこびりついて離れなかった。あの笑顔は、あの話し方は、よほど親しい相手にしか見せないものだった。間違いなく、愛情に満ち溢れたものだった。そこには、自分の入る余地などどこにもないと痛感させられた。

恭介の落ち込みは、自分でも驚くほど大きかった。生まれて初めての酷い落ち込みかただった。それは、予想した通り、翌日にも、翌々日にも、続いた。情け容赦なく続いた。その間、状況を知らない亜里沙からは、何度も電話がかかってきていた。

ずっと出ずにいると、今度はメールが多く来るようになった。何度も、何度も、きていた。

「とにかく、明日の昼、もし来れたらいらしてください。この間の湖畔でお待ちしています」

というのが、最後の文面だった。

九・裏の顔

翌日―。

さんざん迷った末、恭介はその湖畔に向かった。

どこかで、区切りを付けないことには、自分自身も先に進めなかった。

彼女は、いつもの場所で待っていた。

しかし、当然だが、そこにいつもの笑顔はなかった。

「よかった、来てくださったんですね」

少し笑顔になったが、いつものそれには遠く及ばない。

「電話、何度もしたんですよ。通じていたのですか？」

「うん、通じていました」

「じゃあ、体調を崩されていたとか…？」

「いいえ、特にそういうことでは…」

「それじゃあ…、やっぱり…」

亜里沙は、声を詰まらせた。

「やっぱり、ご迷惑だったんですね…」

「そ、そういうわけでは…」

「もともと、ランチにお誘いしたのも私の方からですし…。私が、強引過ぎたんですよ。」

普段はそんなことはしないたちなんですけど、今回はどうかしていました。恭介さんの優しい人柄に、甘えてしまっていたんですね」

彼女は、声を絞り出すように続けた。

「考えてみれば、今の恭介さんは男爵の娘である私から誘いを受ければ、お仕事上断ることとはできない立場ですものね。私は、知らぬうちとはいえ、そのあなたの弱い立場につけ

込んでしまっていたんですね。私って、私って…、卑怯な女ですね…」
とうとう、彼女は涙を流し始めた。

「違う、違う！ それは、違います！ 違いますよ、亜里沙さん！」
恭介は、慌ててそれを否定した。

「違うんだ、亜里沙さん！」
大声で否定した。

「僕は、君と会いたかったんだ。会いたくて、会いたくてしかたがなかったんだ。だから、仕事のことなんかまったく考えずに、君と会ったんだ。自分の意志で、会いたいという自分の感情で、君と会ったんだ！」

「では…、では、何故、急に私との連絡を拒んだんですか？」

「そ、それは…」

「何故なんですか？」

「み、見たんだ…」

「何を見たんですか？」

「君が、男性と楽しそうに車に乗るところを…」

「えっ…。それは、いつのことですか？」

「三日前に…」

もはや、その話を避けることはできなかった。

「水戸のホテルの前で、偶然に…」

「三日前に、水戸の…？」

「うん、間違いなく君だった。そうですね…？」

亜里沙は、ひと呼吸置いて、きつぱりと答えた。

「ええ、そうです。たぶん、それは私だと思います」

「やっぱり、そうだったのか…」

恭介は、肩を落とした。

九分九厘そうだと確信していても、心のどこかでは間違いであってほしいとの一縷の望みを持っていた。だが、やはり、現実はそのようではなかった。

しかし、当の亜里沙の反応は意外なものだった。

「でも、それが何なのですか？」

「な、何なのって…？」

「ですから、それが、恭介さんが私との連絡を拒んでいたことと、何の関係があるんですか？」

それが、開き直りなのか、何なのか、彼女のその態度の真意が計り知れなかった。

「だ、だって、君は、あの人と…」

「あの人と…？」

「パパって、呼んでいたし…」

「パパ…」

そこまで聞いて、彼女は黙りこくった。

恭介の言わんとしている言葉の意味を必死に理解しようとしているようだった。そして、その確認作業に入った。

「つまり、恭介さんは、その男性が私のパトロンのような存在で、二人は付き合っている
と違っていらっしやるんですね？」

「ま、まあ、そんな風にストレートに言われてしまうと…」

「知らず、恭介は彼女から顔を背けていった。」

「つまり、愛人関係とか…？」

「それでも、亜里沙のストレートな確認作業は続く。」

「ま、まあ…、例えば、そんな感じの…」

「恭介は、正直にそれを肯定した。」

「それで、そんな裏の顔を持つ女とは、付き合っていられない、と…？」

「い、いや…、そんな風には…」

「うろたえながらも、事実ではないそれは否定する。」

「そこまですとはいわないものの、付き合うのをためらった、と…？」

「ま、まあ…、そんな感じの…」

「彼女を追い込んでしまったはずの恭介が、完全に、逆の立場になってしまっていた。」

「そうだったんですか…」

「そう言っただけで、彼女は何度もうなずく動作を繰り返した。」

「そうですね、そう感じられたのも無理もないと思います。確かに、私はその人を心から

愛していますから」

「亜里沙は静かに、しかし、きつぱりと、そう言い切った。」

「やっぱり…」

「それを突きつけられた恭介は、再び、肩を落とす。」

「でも、それは、恭介さんが考えているような愛情とはまったく違うものです」

「えっ…。どういう意味ですか？」

「それは、いわゆる男女間の愛情ではなく、親子の愛情の方です。つまり、娘の私から父
親であるあの方への愛情です」

「えっ…。だって、君は男爵の娘さんでしょ？」

「勿論、そうです。私の実の父親は、間違いなく、近衛慎一郎です」

「じゃあ、その男性は…？」

「育ての父です」

「育ての…？」

「話は、恭介が考えもつかない展開になっていた。」

「亜里沙は、持ってきた大きな籐製のバスケットからビニールシートを取り出して、その
場に敷きはじめた。彼女の方は、すっかりと落ち着きを取り戻しているようだった。その
仕草と小さな笑みを浮かべた横顔には、すでに余裕さえ見えてとれた。一連の話の中で、ひ
とつの大きな山場を越えたかのような、そんな安堵感からくる余裕なのだろう。」

「だが、一方の恭介は、いまだに疑問だらけの状態だった。そんな彼を気遣うような彼女
の行動だった。」

「座ってお話ししましょう」

「う、うん…」

「彼女に促されるままに、恭介はその上に腰かけた。」

「訳あって、実の父である慎一郎とイタリアや日本で一緒に生活するようになったのは、ここ数年のことなんです：」

彼女が、ゆつくりと説明を始めた。

「子供の頃からそれまでの十八年近くは、その方が日本での私の父親代わりになってくれていたんです：。その方の名は、工藤辰夫さん。今の茨城県知事です」

「ええっ、あの人が、県知事：。現役の？」

「ええ、そうです」

恭介の驚きの反応を軽く受け止めながらも、彼女は話をつづけた。

「その工藤さんとMJの三上さんと慎一郎は、若い頃からの親友同士なんです。それも、並みの親友関係ではないそうです。三人は、互いの命を預けあうほどの絆で結ばれている仲だと、事あるたびに聞かされています。事実、私という命を慎一郎は、工藤さんや三上さんに迷うことなく託していましたから：」

「確かに、人の子供をそんなに長い間預かって育てるなんてことは、並みの関係ではできないことだよね：」

「はい。しかも、実の子と遜色がないほど、大きくて深い愛情で育てていただきました。本当の子供のように、大切に育てていただきました。ですから、工藤さんには、感謝という言葉では収まりきれないほど感謝しています。勿論、私も本当の父親のように愛しています。私は、工藤のパパが大好きです！」

「そうか：。それで、あの時そんな風に見えたのか：。そうだったのかあ：」
驚くほどの速さで、複雑に絡み合っていた疑惑という糸が解きほぐされていく。

「ええ：。工藤さんは公務の便宜上、あのホテルをよく利用されるのです。ちようど、あの時もそうだったんです」

「そうか：、そういうことだったのかあ：」
すべての真実が確認できた。

だが、それと引き換えに、恭介はすぐに大きな自責の念に襲われることになった。

「僕は：、僕は、何て馬鹿者なんだ！ どうしようもない大馬鹿者だっ！」

恭介は、自分の愚かさを恥じた。

「本当に、酷い誤解ですよ」

亜里沙からも、それを責められる。

「私が、そんな女に見えたんですか？ 第一、もし本当に愛人であれば、真昼の人通りの多いあんな場所で腕組みをして歩くなんてことはしませんよ」

しかし、そういう責めの言葉を発する彼女の口元には、笑みが浮かんでいた。

「恭介さんには、それ相応の罰を受けていただきますからね」

そう言い放つと、彼女は籐製のバスケットから、何やらアルミホイールに包まれたものを取り出して恭介に差し出した。

「おっちょこちよいの恭介さんには、罰として、死ぬほどの思いをしていただきます」

恭介は、わけもわからなのまま、それを受け取る。

「さあ、冷めないうちにいただいでください」

「こ、これは：？」

「恭介さんのリクエストのミート・パイですよ」

彼女は、何事もなかったかのように、ポットを取り出して、お茶の用意をし始めた。

十. 眩きの意味

「こんなに美味しい食べ物、世の中に存在したなんて！」

ミート・パイで口を膨らませたまま、恭介が叫んだ。

「ほほほ…、恭介さんったら。言い過ぎですよ」

「いや、いや。決して、オーバーな表現じゃないですよ。美味しすぎて、死にそうです！」

「それでは、さっきの罰はしっかりと受けていただいたということですね。ほほほ…、」

「はい、間違いなく。完全に、受けてしまいました！」

「では、さっきの話は、忘れてあげますね」

「ありがとうございます！」

二人は、すっかり、普段の自分に戻っていた。

ミート・パイの感動からやっと解放された恭介が、思い出したように訊ねた。

「ところで、男爵はその後、どうですか？」

気軽に訊いたつもりだったが、彼女の反応はそうではなかった。

「実は、最近、物凄く大きな変化がありました」

そう答えた亜里沙の顔から、少し笑顔が消えた。

「えっ、それは？」

「先日の、シドニーでのことなんですが、父が競技中に突然射撃を中断してしまったんです」

「ええっ。それは、何故ですか？」

「その理由がわからないんです。幸い、それは正式な競技ではなくエキシビジョンでしたので、大した騒ぎにはならなかったんですが…。今までに、そんなことは一度もありませんでした」

「そうですか。それは気になる出来事ですね」

「それだけではないんです。そのあと父は、しばらく休むと言い出して、一人でイタリアに戻ってしまったんです」

「本当ですか？ で、どのくらいの期間？」

「始めてのことなので、皆目見当が付きません。父はイタリアの職人組合の正式な会員ですから、その気になれば、何年でも、何十年でも居ることができるんです…」

「そうか、そうでしたね…」

恭介は、男爵が、若い頃からイタリアの銃工房で修業していたことを思い出した。イタリアは彼の第二の故郷であり、ひよっとしたら、日本よりも長く暮しているかもしれないかった。

「ただ、一年後にはパリで世界選手権がありますから、それには間に合わせるとは思いますが…。父にとつての世界選手権は、他の競技会とは違って、特別なものですから」

「オリンピックよりも上なんですよね？」

「そうなんです。父に言わせれば、オリンピックについては、完全に国の代表＝国を背負

うというあたりが、自分のポリシーに合わないそうなんです」

「いかにも男爵らしい考え方ですね」

「ポリシーというと格好がいいのですが、実のところ、その理由は私にもよくわからないんです」

「仮に、何かの理由があったにせよ、今の男爵の存在は、もはや日本だとかイタリアだとかの国という概念を越えてしまっている、というのが世の定説ですよ」

「おそらく、今回のイタリアでの休養は、そのパリの大会に備えてのものなのだと……。でも、もっと悪く想像すると、出場そのものをどうするかを考える為なのかもしれません。

あるいは、更にもっと……」

「そ、そんな。まさか……！」

それを聞いて、恭介が慌てた。

単なる一時的な休養であれば、どうということもないのだが、もし男爵が引退などということまで考えを及ぼせているとなれば大ごとになる。ヤマホのクレール射撃への進出そのもの見直しにかかわってくるからだ。

「亜里沙さん。今回の男爵の一連の行動に、何か心当たりはありますか？」

「心当たりですか……。ひよっとしたら、それは最近父が試合直後に見せるあの態度と関係があるかもしれません……」

「その態度とは？」

「このところ、父は、試合の最後のショットを打ち終わると、必ず銃に向かって何かを呟いているのです。それも、物凄く哀しげに……」

「あのマドリッドの時も、そうだったんですね？」

「ええ、そうでした」

「男爵は、いったい何て呟いていたんですか？」

「注意して見てはいたんですが、結局、わかりませんでした。まるで、銃と会話をしているようにも見えました。実は、一度父にそのことを訊ねてみたんですが、その時はお茶を濁されてしまいました……」

「そうですか。でも、それはシドニーの時に途中で棄権したことと何か関係がありそうですね」

「はい、あると思います。明らかに、父に何かが起こっていると思います。とても気になったので、そばについていたかったのですが、一人になりたいと拒まれてしまいました。

それで、今は私だけが日本にいるんです」

「亜里沙さんも、大変だったんですね」

「ええ。父の行動の真意がわからない分、いろいろと考えてしまいます。なんせ、あんな様子の父を見るのは初めてのことですから……」

そう言って、彼女は湖の向こう側に視線を投げた。

「不思議ですよ。いればいるで、あの通り大変なのですが、いないと逆に心配で、心配で……。あんなに世話の焼ける人なのに……」

彼女は、かなり気落ちしているようだった。

「親子って、そういうものなんですよ……」

母親を早くに亡くした亜里沙にとって、たとえそれがどのような人物であっても、男爵

はたった一人の身内なのだ。その気持は、やはり早くに父親を亡くし、母親一人に育てられた恭介にはそれが痛いほど理解できた。

「あの…、玉木さんにお願いがあるんですが…」
湖を見ながら、彼女がポツリと言った。

「どうぞ、どうぞ、何なりと。死ぬほど美味しいミート・パイをいただいちゃいましたからね、何でも伺いましょう！」

恭介は、努めて明るく答えた。

何とか、亜里沙を励ましたかったからだ。

「この間、おっしゃっていたプカプカ…。私にもお願いできますか？」

「プカプカ…？ ええ、はい。勿論です！」

十一・二本の電話

三か月後―。

静岡県・浜名湖、寸座―。

その週の週末も、亜里沙は浜名湖の穏やかな波間に身をゆだねて揺られていた。彼女と玉木恭介が、そうするようになってから三か月が過ぎようとしていた。

週末は二人で方々にセーリングに出かけた。関東界隈は、水野陽平や顔見知りのヤマホの社員と鉢合わせする恐れがあるので、それは避け、主に静岡方面のセーリング・スポットへ行っていた。

そこでセーリングを楽しみ、そして、停泊させたヨットで寝そべった。

中でも亜里沙が一番気に入っているのが、浜名湖畔にある寸座のスポットだった。二人はいつものように470の上で、波に任せて空を見ながらくつろいでいた。

いい天気だった。ポチャリ、ポチャリと、時々水がヨットの胴体に当たって、それが心地よい音色を奏でている。湖とはいっても、浜名湖は海とつながっている。それがかえって、ほど良い心地の波を提供してくれていた。

「男爵は、いつ競技に戻るつもりなのかなあ…」

浜名湖の心地よい波の揺れに気が緩んだのか、恭介はついその人物の名を出してしまっ

た。

「うふふ…、恭介さん。また、約束を忘れていますよ」

彼女が、笑いながらそれを指摘した。

プカプカをしている時だけは、その人物の名前を出さないのがスタートした時からの二人が決めたルールだった。

「ほほほ…、冗談ですよ。もう随分前から、父への悩みやストレスは完治していますから。このプカプカのおかげで」

「ははは…、助かった」

笑いながら答えた亜里沙は、内心複雑な心境だった。

父親の突然の長期休暇のおかげで、こうして恭介との時間を過ごすことができていた。

恭介と二人で過ごすこの時間は、自分にとって、もはや何物にも代えがたいほど大切なものになっていた。ずっと、この状態が続いてくれればいいと願っていた。その部分に関しては、恭介の方もきっと自分と同じ気持ちでいてくれるだろう。

だが、社員としての彼の立場を考えると、喜んで浮かれてばかりはいられなかった。そもそも恭介がMJ社に外向してきているのは、近い将来に所属会社のヤマホがクレー射撃業界への進出をする為である。そして、その鍵を握っているのが、男爵こと、父親の近衛慎一郎の動向なのである。だとすれば、先の見えなくなったこの状況に恭介が不安を感じ始めているのも理解ができた。つい、男爵の名前を出してしまうのにもうなずけた。亜里沙は、その彼の気持ちも酌んであげなければいけないと思った。

「さっきの話の答えだけど、まだ、父はイタリアに居るようですよ。メールはきちんとしてるので、元気ではいるようです。でも、クレーの方はやっていないみたい。山小屋にもって狩猟を楽しんだりはしているみたいだけど、肝心の競技用の銃は、相変わらず…」

「そうなんだ…。あとのくらい、そういう状態が続くんだろうね？」
やはり、恭介はそれを案じていた。

「そうね。パリの世界選手権まで、もう半年を切っているから。もし、その気があるのなら、いいかげんにそろそろ競技の方の準備を始めないと…」

「さもなければ、このまま競技には復帰せずに引退してしまうのかなあ…」

「ええ。その可能性も出てきたのかもしれないわ…」

下手なことを言っつて、恭介に無用な期待感を持たせるわけにもいかなかった。亜里沙は、そうやって事実を伝えるのが精一杯だった。

その時、彼女の携帯が鳴った。

そして、送信相手の名前を見て、彼女が叫んだ。

「父からだわ！」

「ええっ。本当に？」

恭介も飛び起きた。

二人は、顔を見合わせた。あまりにも突然の電話だった。

「はい、亜里沙です…。えっ、今、成田ですか？…はい。じゃあ、夕食の準備は？はい、わかりました…」

緊張感の中、その電話が終わった。

「成田って…。まさか、男爵、帰って来たの？」

「ええ、驚いたわ。急にですもの…。でも、幸い広尾のマンションには戻って来ないわ。

何でも、誰かと会うつもりだとかで、今夜はホテルに泊るから夕飯の支度もしなくていいそうよ」

「じゃあ、今から急いで東京に戻るとかではない？」

「ええ、大丈夫よ」

「よかったあー。一時は、どうなるのかと思ったよ。でも、久しぶりに日本に帰ってきたその足で、自宅にも帰らずに人と会うとは、精力的な方だなあ。ははは…」

「ええ、本当に。ほほほ…」

二人は、ホッとして笑い合った。

だが、実は笑いごとではなかった。すぐに、恭介の方の携帯が鳴った。見たことのない

番号だった。

「誰だろう…？ もしもし、玉木ですが。 えっ…、あの…？」

恭介の顔色が変わった。

「そ、その節は…。 えっ、今夜ですか？ はい、夜なら何とか大丈夫です。 …はい、そこなら、だいたいわかると思います。 はい。 では、後ほど…」

電話を切った恭介は、茫然としていた。

「恭介さん、顔色が悪いわ。 どうされたの？」

「今夜…」

「えっ、いったい何のこと？ 今の電話は誰からなの？」

「男爵…。 君のお父さんからだ」

恭介が、声を振り絞るようにその人物の名前を吐き出した。

「ええっ。 じゃあ…、今夜、父が会うつもりだと言った相手というのは？」

「どうやら、それは僕のことのようだ…」

「まあ！」

それからしばらく、二人は言葉に詰まった。 突然降りかかったその事態が、まったく理解できないからだ。

「…でも、突然何だろう？ 亜里沙さん、心当たりは？」

「全然、思い当たらないわ…」

「僕も陽平も、あの時以来まったくだよ…。 あんなに怒らせたままの別れ方だから、今夜の呼び出しは、ビジネスの話しのわけがないよ」

「でも、私の方にも心当たりがまったくないわ。 まさか…」

「まさか…、何？」

「まさか、私達のことか…」

「ええっ、僕達のことをお父さんに話したことがあるの？」

「勿論、勿論ないわ…。 恭介さんに関係することは、半年前のあのMJの射撃場での時に一度だけよ。 それ以降は一度たりとも、あなたの話は…。 でも、あの父のことだから、あるいは何かしら感づかれたということも…」

「そうか…」

あの男爵がわざわざ自分の番号を調べてまでして連絡をよこしたとなれば、よほどの大事なことである。 それが、ビジネスがらみではありえないとすれば、答えはそれしか考えられない。 大事な娘のことしかない。 そう考えるのが一番、妥当だった。 であれば、これは、いわゆる男爵からの「呼び出し」に違いなかった。

しばらく考えた後、恭介は亜里沙の顔を真っすぐに見て、言った。

「亜里沙さん！」

「は、はい…」

彼女は、その彼の真剣な眼差しに、ただならぬものを感じ取った。

「今夜、君のお父さんに会う前に、君に、きちんと言うっておく！」

「はい…」

「僕は、こうしてあなたと会おうのをやめない。 誰に止められても、絶対にやめない。 例え、その相手が男爵であってもだ。 僕は…、僕は…」

最後まで言い切る前に恭介の口が、抱きついて来た亜里沙の唇によって塞がれた。バランスを失ったヨットが激しく揺れた。

普段は緩やかな波が、出したこともないような荒くて激しい音をたてていた。だが、それでも固く合わさった二人の唇は、決して離れることはなかった。

やがて、揺れが収まって、ゆっくりと彼女が唇を離した。

そして、決意に満ちた表情で言った。

「恭介さん、私の為に戦ってください。私達の幸せを守ってください！」

十二・真実の告白

その日の夜。

東京、銀座―。

玉木恭介は、例えようのない緊張感に包まれながら、その店の皮張りの重いドアを押し開けた。

銀座六丁目の一角にあるそのバーは、歴史と風格を感じさせる重厚な造りの店内だった。さすがは、男爵が指定した店だと思った。だが、彼も含めてまだ客は誰もいないようだった。

「いらっしやいませ、お一人ですか？」

カウンター越しに、年配のバーテンダーが声をかけて来た。

「実は、ここで待ち合わせをしております……」

言いかけたところで、バーテンダーは遅れて入ってきた客に会釈をした。

男爵だった。

「玉木さん、久しぶりです。お待ちせしましたかな？」

「いえ、僕もちょうど今来たところですよ」

「それはよかった」

言いながら、男爵は、迷うことなくカウンターの中央に陣取った。

「いらっしやいませ」

バーテンダーは一礼するだけで、男爵には何も聞かなかった。

「何を飲むかね、遠慮はいらんよ？」

「そうですね……」

恭介があれこれ迷っているうちに、バーテンダーが正面の棚から出したウイスキーとグラスを男爵の前に置き、支度を始めた。シーバスリーガルの三十年物だった。幾重にも重ねられたネームタグには名前の代わりにコールマン髭の模様が書いてある。がっしりとした造りの凝ったグラスは、底の裏側からバカラの文字が透けて見える。間違いなく、ここは男爵が鼻貞にしている店なのだ。

「君も、これにするかね？」

「でも、これは男爵の……。それに年代物ですから……」

「ははは……、そこまで気にしなくてもかまわんよ。特に、他に希望がなければこれを付き合いたまえ。癖のない旨い酒だ」

「はい。じゃあ、そうします」

「では、同じものを」

黙って領いて、バーテンダーが一般客用のグラスをひとつ出して、準備を始めた。しばらく、二人は何も話さなかった。

男爵が、その明晰な頭の中で何を考えているのかは、まったく想像がつかなかった。だが、恭介は、うかつに声をかけられなかった。

一番恐れているのは、亜里沙とのことだった。すでに、彼女は自分にとってかけがえない人になっている。知られてはいないつもりでいたが、もし、今日の男爵の呼び出しの目的が自分と彼女との話であれば、かなりやっかいなことになる。所属会社であるヤマホとの提携の話は、自分の個人的な理由でご破算になる可能性があるからだ。

「それじゃあ、いただきます」

自分の前にグラスが差し出されるや否や、恭介がそれを手にした。

それが、じっくりと味わうべき類の酒であることなど忘れて、恭介はがぶがぶと飲み干した。過度の緊張で、口の中が経験したことがないほど乾ききっていたからだ。

だが、二杯目のお代りが注がれてから、さすがに何か話さなくてはと思った。

それを訊くのは怖かった。しかし、それ以上にこの沈黙が怖かった。怖くて仕方がなかった。恭介は無意識のうちに自分の唇に手を当てていた。まだ、数時間前のヨットの上で亜里沙の熱い唇の感触が残っていた。最悪の結果になっても、彼女は覚悟を決めてくれた。自分に将来を託してくれた。それに勇気づけられ、腹をくくって恭介が口を開いた。

「いい店ですね。さすがは男爵の使われている店、という感じですよ」

もっと気のきいたことを話すべきなのだろうが、恭介にはこの程度の言葉しか浮かんでこなかった。

世界中から、この世に存在する限りの賛辞を日常的に受けている男に対しては、あまりにも陳腐な表現かもしれなかった。

だが、それに対する彼の返答は意外なものだった。

「うん。勿論、この店は素晴らしい。しかし、はたして君が言うように、それに私のような者が相応しいかはわからないがね」

「そ、そんな、ご謙遜を…」

皮肉にも取られかねないほどの謙遜だと思った。

だが、男爵は本心で言っていた。

「世間では、私のことを貴族か何かの由緒ある名家の出身だと思っっているようだね？」

「はい、そういう話も聞いていますよ」

「ははは…、それはまったくのデタラメだよ。おそらく、男爵と言うニックネームのイメージから作られていったものだろうが…。風評とは実に恐ろしいものだ」

男爵が、うつむき加減に話を続けた。

「だが、私も周囲にそう思われてうちに、そのイメージを利用するようになっていたのだ。気がつかないうちにね。そうしていくうちに、自分でも嫌になるほど傲慢な男になってしまった」

そういって、男爵は恭介の顔を見た。

「今日、君に来てもらった理由の一つは、この間の非礼を謝ろうと思ったからだよ。本当に、すまなかった」

男爵が、目を閉じて深々と頭を下げた。

「い、いや、そんな。やめてください。あれは、完全に僕達が悪かったんですから！」
想像もしなかった男爵の行為に恭介は驚き、慌てた。

「そうか…。そう言ってもらえると、少しは気持ちが悪われる」

「どうか、そんな言い方はもう…」

「わかった。では、今回は君の厚意に甘えさせてもらおう。…ところで、君のご両親は健在かね？」

「いいえ。父は早くに亡くなり、母親ひとりです」

「そうか。それは、すまなかったね。では、私と同じなのだね」

「男爵も、そうなんですか？」

「うむ。正確に言うと、父親は早くに亡くしたが、母親の方は私が小さい頃に出て行ってしまつて、それっきり会っていないのだ」

「そうなんですか…」

彼はウイスキーを呷ると、何かを決意したように一度頷き、そして話し始めた。

「柄にもないので、身の上話など誰にもしたことがないのだが、聞いてくれるかね？」

「ええ、是非、聞かせてください。実は、今の僕はあなたの話が訊きたくて仕方がないんです」

「そうか、ありがとう。何故だかわからんが、私の方も君に話したくなつた」

小さな笑みを浮かべてそう言うと、男爵は話し始めた。

「…実は、私の父はプロのギャンブラーだったのだ」

「プロの…？」

「まあ、そう言うのと聞こえがいいが…、言ってみれば、たちの悪い流れ者の賭け師さ。貴族の出身だなんて、笑つてしまうよ」

「ギャンブルというと、どんなことを…？」

「父は、ビリヤードの賭け師だったのだ」

「あのビリヤードで賭けをするんですか？」

「うむ…。金を賭けて、客と勝負をするのだ。勝負をするというよりは、巻き上げると言つた方が正しいだろうな。今はもうどこにもいないが、昔はそういうのを商売にしている人間がいたのだよ」

「そういえば、そういう映画がありましたよね？」

「ハスラーだね。でも、そんなに恰好のいいものではないよ。実際のそれは、最低の人間がやるものだ」

一度ため息をついて、彼は続けた。

「そんな父に愛想を尽かしたのだろう。母親は家を出て行ってしまった。だから、幼い頃から私は父についていくしかなかった。それこそ日本中を連れ回された。文字通り、放浪の旅さ。あらゆる歓楽街のそういった類の店を転々としたよ。場末のどうしようもない店ばかりだ…」

あまりにも、想像とかけ離れた過去だった。

「当然、修羅場にも何度も遭遇した。勝っても負けても、相手が悪いと最後は喧嘩沙汰になる。店の路地裏で地元のヤクザ者に袋叩きにされたこともあった。だが、そんな父でも、結局、私は好きだったのかもしれない。お父さんを蹴らないで、と、ヤクザ者に必死にしがみついて許しを乞うたこともあったよ……」

恭介は、言葉が出なかった。男爵は、淡々と話を続けた。

「そんなある日、父が賭けに負けた客から形(かた)にとった一挺の散弾銃と出会った。勿論、スポーツシューティングなど普及していない当時のことだから、狩猟用のものだ。昔は、今ほどは規制が厳しくなかった。まだ、銃で狩りをして生計をたてている人が沢山いたからだ。それが、私の転機になったのだよ。私は父の目を盗んでは、山の中で鳥や獣を撃った。勿論、誰から教わるわけでもない。まったくの独学だ。私はその銃に夢中になった。ビリヤードで身につけた的を捕える間隔と角度の考え方、そして、裏社会で生きて行く為の生死ギリギリの集中力と勝負勘。皮肉なことに、軽蔑していた父の稼業から得たものが役立っていたのだろう。私はどんどん腕を上げていった。そんな中、高校生の時にMJの三上とめぐり会ったのだ……」

男爵は、ウイスキーを口にして、一息つくくと、話を再開した。

「父親が亡くなり親戚に育てられていた私は、銃の修行の為に高校を卒業してすぐに、単身でイタリアへ渡った。そこからは、君達も知っている私のプロフィールの通りだよ……。今話したそれ以前の生い立ちの部分は、ずっと世間には隠されてきたのだ。私がイタリアへ渡ったのは、自分の銃の才能を磨きたかったからだ。そして、私のその才能を見出してくれた三上恵造に、何らかの形で恩返しをしようと思ったからだ。だが、それだけではなく、そんな生い立ちを捨て去って、新しい人生をやりなおしたいという理由もあったのかも知れない。都合のいいことに、私に胡麻をする誰かが貴族の出身ではないかという話を言い出したので、そのままそういうことにしておいたのだ。これが、バロン・近衛の真実だ……」

それから、沈黙が続いた。

一分なのか、五分なのかはわからない。だが、今度はもう恭介から話を切り出すことはできなかった。ただ、待つしかなかった。

「実は、このところ自分の射撃に迷いが出ている」

ようやく、男爵が口を開いた

「迷い……ですか？」

「うむ……。虚しいのだ……」

「虚しい？ ひょっとしてそれは、ライバルがいないからですか？」

孤高の男にしかわからない悩みだと思った。

亜里沙とともに理由が知れたかった話だった。

「いやいや。いくら私でも、そこまで自惚れてはおらんよ。相手が誰であろうと常に警戒を怠らず、全力であたっている」

「すみません。てっきり、そうなのかと……」

「そうではなくて、自分自身の心の中の問題なのだ」

「心の中の？」

「うむ……。物心がついた時からこだわってきた、勝負師としての心が疲れて来ているのだよ。最近、勝ち負けではなく、純粹に楽しみたいと思うようになってしまったのだ。」

実は、この半年余りそのことに悩んで、ずっとイタリアに引きこもっていたのだ」

そう言うと、男爵が恭介の正面に体を向けた。

「君のことは、三上や田代の親父さんから良く聞いている。志がしっかりしているし、なかなか筋もいと褒めていたよ」

「田代さんが…」

田代とは、MJの職工頭の田代幸吉のことである。銃造りの名匠と謳われる田代は、男爵がこの世で認める数少ない人間の一人でもあった。そして、彼は、今の恭介の師匠であった。

「私は今まで、自分に厳しい銃で戦ってきた。だが、これからはもう少し自分に優しい銃を使ってみたいと思っている。そこで君に頼みたいのだが、そういう銃の開発に協力してくれないか？ できれば、それを半年後のパリに間に合わせたい」

「新しい銃を…、僕と…？」

「そうだ。私の新しい夢を、MJとヤマホで手伝って欲しいのだ。どうだね。協力してくれるかね？」

「はい、勿論。喜んで！」

十三. 驚きの叫び

恭介と亜里沙は、大磯駅から浅間山に向かう遊歩道を歩いた。

登りきると、湘南平だった。

二人は、展望台のあるレストハウスに向かう。一番上の展望デッキまで上がると海拔二百メートル近くの高さになる。

「わあー、素敵だわー！」

亜里沙が、感嘆の声を上げるのも頷けた。

ここから見渡せる三百六十度の眺めは、素晴らしいの一語に尽きた。東は江の島から遠く三浦半島までを望み、反対側には箱根から富士山を望めた。正面には小田原から、大磯、茅ヶ崎と湘南の海岸線がカーブを描いている。

「気に入ってくれた？」

「ええ。こんなに素晴らしい景色が見られるなんて感激だわ。ずっと、ここで眺めていたいほど！」

「よかった」

「恭介さんは、ここで生まれ育ったんですね…」

眼下に広がる大磯の街並みを見渡しながら、亜里沙が感慨深げに呟いた。

「うん…。あのあたりが、僕の家だよ…」

恭介が、海岸線に沿って走る西湘バイパスと国道一号線の間の住宅地のあたりを指差して言った。

「僕には三つ年上の兄がいてね…」

恭介が、景色の方々を指差して説明するうちに、自分の生い立ちを話し始めた。

早くに父親を亡くした恭介にとって、兄がすべての手本であり目標であった。船遊びも

兄に教えてもらった。古いボートに代用品のマストと帆を張って手製のヨットを造り、沖合に出た。最初は茅ヶ崎あたりまで。そのうちにだんだん距離を伸ばして、江の島を超えて葉山まで行くようになった。恭介はその熱に取りつかれ、高校に入ってから本格的なヨットの選手になったのだ。

二人は、しばらく展望デッキからの眺望を楽しんでいた。そのうちに、視線をデッキの周囲に移した彼女が不思議そうに訊ねた。

「さつきから見ていると、若いカップル達は向こうにある電波塔の方に行くようだけど、あそこも景色がいいの？」

湘南平の敷地の隅に、東京タワーを小型にしたような電波塔が立っていた。

「ああ、あれはただのテレビの中継用の電波塔なんだけど、その金網に恋人達が自分達の名前を書いた南京錠を掛けて行くんだ。そうやって永遠の愛を誓うという、若い恋人達の間ではけっこう有名な恋愛の儀式なんだよ」

「へえー、ロマンチックな話ねえ」

亜里沙が、再び感慨深げに呟いた。

「そうだね。…さてと、そろそろ時間だから、実家の方に行こうか？」

「ええ…」

再び大磯駅に戻り、一旦コインロッカーに預けていた彼女の荷物を持って、今度は海の方角へ向かう。

駅舎の正面から左側にカーブした坂を国道一号線の方へ下っていく。

戦前から、変わらずある道だ。恭介は、子供の頃からこの坂の木漏れ日の下を歩くのが好きだった。国道を渡って住宅密集地に入ると、すぐに恭介の実家があった。もうひとブロック行けば、すぐに海というところにある二階建ての一般的な建物だった。鉄製の小さな門を開ければ、すぐに玄関だ。この界限は皆そういう造りの家ばかりが並んでいた。

「ただいまー」

「おかえり」

恭介の母親が、待ちかねたように奥から玄関に出てきた。

「母さん、連れて来たよ。電話で話した近衛さん」

「始めまして、近衛亜里沙と申します。今日は、お邪魔いたします」

「恭介の母の美千代です。さあ、あがってくださいいな」

居間に入ると、亜里沙が大きな紙包みを美千代に差し出した。

「これは、両方とも私が作ったものなのですが。よろしければ、召しあがってみてください」

「まあ、何かしら…」

包みをほぐし、中にある綺麗な二つの箱を開けてみる。

箱にはそれぞれ、パウンドケーキとミート・パイが詰められていた。

「まあ、美味しそう。これ、あなたが？」

「はい。見かけ倒しでなければ良いのですが」

恐縮する亜里沙を、恭介が援護した。

「亜里沙さんから母さんへの手土産を相談されたので、僕がアドバイスをしたんだ。下手なものを買っていくより、絶対にこの方がいいって」

「どうかとは思ったのですが、失礼になるのではと…」

「いいえ、亜里沙さん。これが一番です。恭介は、私の性格を良く分かっていますわ」

美千代が、優しく微笑んだ。

「ほらね、亜里沙さん。僕が言った通りだろう？」

恭介が、得意気に言った。

「驚くよ、母さん。両方とも、それこそ死ぬほど旨いんだ。そんじよそこのレストランや洋菓子屋さんなんて目じゃないほどだよ」

「お願い、恭介さん。もう、それ以上は…」

「大丈夫。味の方は、僕が保証するから。とにかく、母さん。食べてみてよ」

「ほほほ…。恭介がそこまで言うのなら、さっそくいただいてみましょうかね」

美千代が、箱を持って立ち上がる。

「パイの方は、どのくらいの程度に温めたらいいのかしら？」

「私が、ご一緒しますわ」

「そうね。それじゃあ、最初だけはお願ひしようかしらね」

二人が、仲良く台所へ向かった。

それからすぐだった。

「恭介、いるのかあ？」

玄関の方から、大きな声がした。

「おう、いたいた」

水野陽平が、どかどかと入ってきた。

近所に住んでいて、子供の頃から二十年以上出入りしている彼にとっては、ここは自分の家と同じようなものであった。しかも、この半年ほどは恭介より彼の方が圧倒的にここへ来ている回数は多かった。

「よう、久しぶり」

「久しぶりとかじゃないぞ、恭介。おまえ、このところ週末にも全然ここに顔を出さないじゃないか。お母さんも、こぼしていたぞ」

と、一応は叱って見せた陽平が、テーブルの上のパウンドケーキを目ざとく見つけた。

「おっ、旨そうなケーキだな。よしよし、いい心がけだ。このケーキで許してやろう。なんたって、お母さんを気遣ってこの僕がずっとここに顔を出して、なかなか帰ってこないおまえの代役をやっていたんだからな。寛大な親友に感謝しろよ」

「ああ、その点は感謝しているよ…。だけど、そのケーキは僕が持って来たものじゃない

よ」

「えっ、おまえのお土産じゃないの？」

「あら、陽平さん…。お久しぶりです」

ちやうどそこへ、紅茶を乗せた盆を持った彼女が現れた。

「あっ、あっ、亜里沙さん？ えっ…。な、何で？」

陽平は、何が何だか分からなくなっていた。

「えっ、どういうこと？」

「陽平、落ち着いて聞いてくれ。今日ここにお前を呼んだには理由があるんだ。話せば長い…。結論から言うと、僕達は結婚しようと思っている」

「え、ええーっ！」

陽平の驚きの叫びが、大磯町の界限に響き渡った。

十四・男爵の高笑い

一か月後―。

フランス、パリ―。

セーヌ川を渡すコンコルド橋とロワイヤル橋の間に、人だけが通れる橋があった。

床が木製で造られているアーチ型のその洒落た歩道橋は、十分な広さがある為に休憩や見物用に中央にいくつかのベンチが並んでいた。男爵はその真ん中に陣取り、目の前のセーヌ川と対岸に見えるオルセー美術館をぼんやりと眺めていた。

彼は、言いようのない充実感と安堵感に包まれていた。

こんなに晴れ晴れとした気分は久しぶりだった。ヤマホと共同開発した銃で、無事優勝を果たせたからだだった。

これで自分の役割は果たせた。あとは、ヤマホが、口髭のマークのブランド「バロン・シリーズ」を世界のマーケットに展開してくれる。同行していた社員の玉木恭介は、大喜びでその報告と準備の為に帰国して行った。男爵は秘書役の亜里沙も先に日本に帰し、一人でここに留まっていた。ヤマホが報奨金とは別に、世界選手権六連覇のお祝いに、彼に一週間のパリの滞在をプレゼントしてくれていたのだ。五つ星ホテルの宿泊とファーストクラスの航空券だった。

ふと、日本語が聞こえてきた。

「まあ。これって、パリでも流行っているのねえ」

どうやら、日本人観光客のようだった。

数人の中年の女性達が、橋の手すりを見て何やら話している。

「あら、見て、見て。ほら、日本語もあるわ！」

「まあ、本当。こんな場所で永遠の愛を誓い合うなんて、素敵ねえ！」

やがて、彼女達が立ち去った。

彼女達が何の話をしていたのかが、何故か無性に気になった男爵は、それを見に立ち上がった。

橋の金属製の手すりには、何百という沢山の南京錠が掛けられていた。よく見ると、そのすべてにそれぞれの国の言葉で、愛情を表現する文字が刻まれている。フランス語、英語、イタリア語…。

その中の一つが際立って反射光を放ち、それが彼の目に入った。

それに惹きつけられるように見てみると、理由がわかった、沢山の鍵の中でもつけたばかりの新しいものだったからだ。真新しい鍵の表には、日本語で「セーヌにて永遠の愛を誓う」と刻まれている。おそらくさっきの女性達も、この鍵を見て話していたのだろう。

男爵は、何気なくその裏側も見てみた。

彼の眼が、大きく見開かれた。

男爵はしばらく無言で、じっとそれを見ていた。そして、彼は高らかに笑い始めた。

「はは……。こいつは、傑作だつ。わっははは……！」
そこには、二人の日本人のカップルの名前が刻まれていた。
玉木恭介・近衛亜里沙。
男爵の高笑いが、パリの空に響き渡った。

了